

『坊つちやん』とステイブンソン「ファレサアの浜」

— 不完全なヒーロー像と植民地主義的な構造について —

レオン・ユット・モイ

はじめに

夏目漱石は文部省に命じられたイギリス留学を終え、帰朝してから三年後の一九〇六（明治三九）年四月『ホトトギス』に、『坊つちやん』を掲載した。漱石文学と英文学との切り離せない関係について、長年にわたって様々な研究者によって解明されてきた。漱石は確かにシェイクスピアやメレディスを愛読したが、もう一人のイギリス人作家、誰もが知っている『宝島』『ジークル博士とハイド氏』の作者であるロバート・ルイス・ステイブンソンとの関係も決して看過できない。漱石とステイブンソンとの影響関係についてよく言及されるのは、『彼岸過迄』と“New Arabian Nights”（新アラビア夜話）である。『坊つちやん』とステイブンソン作品の比較研究（「ファレサアの浜」）について、管見では二〇〇六年以前には指摘されておらず、研究の余地が十分あると考えている。前稿^{〔註〕}

において、『坊つちやん』と「ファレサアの浜」との比較をし、一人称の語り手の設定、言葉、プロットの図式、語り手の主人公の共通点について考察を行った。一見したところ全く異なった両作は、想像以上に多くの類似点を持っている。

「ファレサアの浜」の筋は極めて簡単である。白人ジョン・ウィルトシャは、商売のためにファレサアという島に転住する。そこで、英語国民だが国籍不明、土語をうまく操って立派な教育があるケイスは温かく出迎えてくれて、「土民」^{〔註〕}の女性ウマとの不正な結婚をウィルトシャに勧めた。つまり、ケイスの腰巾着は偽牧師に扮し、聖書のかわりに「小説本」を使い、「非合法的に一週間」結婚する云々という内容の結婚証書をウマに渡した。彼女はそれを「黄金」のように大切にしている。実は、ウィルトシャの来島前に、ウマは「土民」に排斥されて交際禁止を食っていた。自分の商売を妨害するためにケイスが故意にウマとの結婚を勧めたことを知ったウ

イルトシヤは、ケイスと敵対し始めた。ウマと結婚している限りは商売ができないことを覚悟した上で、ウィルトシヤは結婚証書を引き裂いて「非合法」な結婚を取り消し、改めて正式に結婚させるよう宣教師に頼んだ。ファレサアの叢林に魔物がいるという話を聞き、藪の秘密の真相を探ろうとするウィルトシヤは藪に入って、「土民」を怖がらせる仕掛けがケイスの仕業であることを見破った。彼は夜に爆弾を持って再び藪に入り、仕掛けを打ち壊した後、ケイスと死闘して敵を刺殺した。その後、ウィルトシヤは英国に戻らず、妻子と一緒に島で暮らし続けた。

『坊つちやん』と『ファレサアの浜』との接点は、一九〇六年八月三十一日の『国民新聞』に掲載された「『坊つちやん』の著者」と題した談話記事にある。「さうでした、ウンさうだ、スチーヴンソンの『アラビヤナイト、エンターテイメント』です、之から思ひ付たんです、第一人称で書て英語も大部変つてゐる、此に習ふならばランメー言葉でなくちや可けない、悪棍が居て色々なこともしますがね、其のマア調子ですね、調子を学んだといへば言ふんです（中略）結構は「ほつちやん」より簡単です、人物も那樣に沢山出て来ません、けれども之から脱化したとは誰も氣つくまい、只だ調子丈ですからね」と漱石は言っているが、実際には、「アラビヤナイト、エンターテイメント」という作は存在せず、ステイブンスンの作品群では三編の物語で構成されている『Island Nights』

Entertainments」（『南海千一夜物語』）の中で、『坊つちやん』が最も「調子を学んだ」可能性があるのは「ファレサアの浜」（『The Beach of Fatagan』）である。前稿ではこの緒から、両作の共通点を考察した。

さて、本稿では、その続編として、登場人物の造型、物語構造において両作をよりいっそう深く探っていく。十九世紀に南海の植民地にいる白人貿易商にまつわる出来事やその実像を描く「ファレサアの浜」からヒントを受け、漱石がそれをもとのように日本の「四国辺のある中学校」の学校物語に書き換えたのかについて考察していきたい。今度は、物語の人物像、特に語り手の男性主人公に見られる二面性、彼らを支える女性登場人物の共通項、悪役の近似性や、物語構造に焦点を絞り、「ファレサアの浜」に見られる植民地主義、人種差別主義などを、漱石がどのように『坊つちやん』の素材にしているのかを明らかにしたい。

一、不完全なヒーロー

漱石は「調子を学んだ」と言っているが、人物造型上「ファレサアの浜」の主人公ウィルトシヤから、どのようなヒントを受け、どのように坊つちやんに書き換えたのだろうか。ウィルトシヤと坊つちやんは、それぞれの物語で悪玉を懲らしめるヒーローとして登場しており、まずは、両作の人物像、特にこの二人に見受けられる二

面性について考察していきたい。論者は、「ヒーロー」という言葉で、二つのことを意味しようとしている。一つ目は物語の「男性主人公」を指し、二つ目は悪を懲らしめる「英雄」を指す。まず最初に、両作の男性主人公は、それぞれに与えられた身分や職業に合わない性格のヒーロー（男性主人公）として描かれている。ウイルトシヤは白人貿易商でありながら、普通の貿易商と異なっており、島の女性との「非合法」な結婚という「慣例」に違和感を感じ、「良心」を持つ貿易商である。他方、坊っちゃんも教師でありながら、教師の役目をきちんと果たせず、生徒に冷淡で「失格教師」のように描かれている。次に、二人とも悪党を懲らしめるヒーロー（英雄）だが、現地の人々に愛される完全な正義漢のように造型されず、むしろ疎外される異質な存在のように描かれている。また、現地の人々を蔑視するというマイナスの資質を持つヒーローでもある。人物造型上は、ウイルトシヤ像の二面性に注目せねばならない。ウイルトシヤは、ウマとの「非合法」な結婚式が行われる際に、良心の呵責を感じている。

ウマと手を取り合った時には良心がとがめ、ウマが結婚証書を貰った時には、一層の事この約束を破棄して、総てを打明けたいような気持になった。

（一九頁）

にもかかわらず、そのような「良心」を持つウイルトシヤは、次のように言い訳をする。

これが地方の慣例であり、それは少しも（自分が自分に言い聞かせた通り）白人の罪ではなく、宣教師が悪いのである。宣教師が土民に布教さえしないなら、別にこうやって瞞す必要も無く、好きだけ幾らでも妻を迎えて、いつでも良心の呵責なしに別れるのであろうに。

（二〇頁）

ウイルトシヤは、ウマを欺瞞するのを恥ずかしく感じながらもそのような「慣例」に従い、ウマと「非合法」な結婚をしている。ウイルトシヤは最初に「良心」的な考えをしたが、結局無批判に悪いことを受け入れた。「其のママ調子ですな、調子を学んだといへば言ふんです」と言った漱石が、ウイルトシヤの人物像に散りばめられた二面性を見て取らないはずがない。坊っちゃんのほうは、教育者でありながら生徒と対峙する教師である。生徒を「寛棒め」「あんな奴を教へるのかと思つたら何だか気味が悪くなつた」「どうも厄介な奴等」「けちな奴等」「こんな腐つた了見の奴」「まるで豚」と呼ぶだけでなく、あまり早くて分らない、もうちょっとゆっくり話してという生徒の要請に、「分らなければ、分かる迄待つているがい、」と答え、また、生徒の質問に答えられないとき、「そ

んなものが出来る位なら四十円でこんな田舎へくるもんか」という文句を洩らした。善玉のほうに属するうらなり、山嵐、あるいは読者らは、坊っちゃんの復讐に喝采するが、生徒にとって坊っちゃんはずしも良い先生ではない。つまり、「ファレサアの涙」「坊っちゃん」では、悪党を懲らしめる人は、物語内のすべて（少なくとも悪党以外）の人々にとって必ずしも肯定的なイメージを持つ人物ではない。

先述したウィルトシヤの自家撞着、矛盾した二面性のような「調子」を、漱石は坊っちゃんに書き換えをしたのである。要するに、二人とも完璧、完全なヒーローでなく、正と負の二面性を持つ「欠陥」のある不完全なヒーローだといえよう。漱石は『坊っちゃん』の登場人物についてこのように述べている。

拙文御推賞にあづかり感謝の至に不堪候山嵐の如きは中学のみならず高等学校にも大学にも居らぬ事と存候然しノダの如きは累々然としてコロがり居候。(中略) 山嵐や坊っちゃん如きものが居らぬのは、人間として存在せざるにあらず、居れば免職になるから居らぬ訳に候。(一九〇六年四月四日付大谷繞石宛

書簡)^(註3)

『坊っちゃん』の中の坊っちゃんといふ人物は或点までは愛すべく、同情を表すべき価値のある人物であるが、単純すぎて経験が乏し過ぎて現今の様な複雑な社会には円満に生存しにくい人だ(後略)。(「文学談」)^(註4)

漱石自身も、坊っちゃんが愛されるべき人物である一方、「教育者として適任と見做さる、狸や赤シヤツよりも不適任なる山嵐や坊っちゃん」(前掲大谷繞石宛書簡)が免職に至るような教師で、社会性に相応しくない人間だと、坊っちゃんの正と負の二面性を認める。しかし、坊っちゃんと同じような立場に立ち、「奸物」と対峙する山嵐は、坊っちゃんと異なつて、「一番生徒に人望があるのださうだ」が、結局学校を離れざるを得ない。漱石は坊っちゃんの口を借りて「生徒の人望があるから転任や免職は学校の得策であるまい」という納得できない考えを洩らしている。「一番人望のある教師」である山嵐が学校を去るという結果を迎えるという教育現場でのアイロニーを設けるほか、漱石は世相に対しても皮肉な口調で批判を加えている。

考へて見ると世間の大部分の人はわるくなる事を奨励して居る様に思ふ。わるくならなければ社会に成功はしないものと信じて居るらしい。たまに正直な純粋な人を見ると、坊っちゃんだの

小僧だのと難癖をつけて軽蔑する。夫ぢや小学校や中学校で嘘をつくな、正直にしると倫理の先生が教へない方がい。いつそ思ひ切つて学校で嘘をつく法とか、人を信じない術とか、人乗せる策を教授する方が、世の為に当人の為にもなるだらう。

(二〇三頁)

「一番生徒に人望がある」教師である山嵐に対して、坊っちゃん
は常に生徒との間に軋轢を起こしている。川嶋至氏は、坊っちゃん
の教師像について次のように指摘している。

漱石が坊っちゃんを肯定的な人物として描けば描くほど、教育者としては失格せざるをえないわけである。そこに、『坊っちゃん』を学校小説として読んだとき、正義漢でありながら生徒に冷淡な失格教師というちぐはぐな像を結ぶ大きな原因がある。^(注5)

坊っちゃんが「肯定的な人物」として描かれながら、その一方では「失格教師」という負のイメージも浮上する。このような二面性を持つ人物像の造型は、ウィルトシヤと一致する。ステイーブンソンは、悪党を懲らしめるウィルトシヤを、完全なる肯定的な人物として描いていない。「正義漢」でありながら「土民」を蔑視し、人でもない結婚証書で現地の女性を欺瞞する、善・悪の二面性を持つ

つウィルトシヤも、「正義漢でありながら生徒に冷淡な失格教師」である坊っちゃんも、二人とも不完全なヒーロー像である。

また、ウィルトシヤと坊っちゃんの人物造型では、もう一つ看過できない点がある。それは、二人とも「脱落者」のような存在であることである。大谷裕文氏は、次のように指摘している。

十九世紀になると、タヒチに南海楽園の決定的なイメージを与えたゴーギャンとサモアのツシタラ（語り部）として称揚されたステイーブンソンが、ポリネシアに滞在する著名な西洋人として広く知られるようになった。しかし、この両者は、共にヨーロッパ社会の「脱落者」であり、日常生活への回帰を前提とした旅行者であると言えない。^(注6)

大谷氏の指摘のように、健康が優れていなかったステイーブンソンは南海の暖かい国へ渡り、また、彼が描いていたウィルトシヤは、「自分は此処ならば一身上つくり、郷里へ帰って居酒屋を始める事が出来るに違いないと思つて、最初は「日常生活への回帰」を望んでいる。ウィルトシヤや、ケイスのような貿易商は、金を儲ける目的で西洋を離れるのである。ウィルトシヤは、ファレサアに來る前に四年間も赤道の近くの珊瑚島で、大抵一人で「土民」の間に暮らし、「灯火一つを友にして夜を家で過こしたり、渚を歩き乍

ら」孤独感・疎外感を覚えていた。坊っちゃんも赴任する前に東京でこのような疎外感を抱いたのではないか。父親はどうせ碌なものにはならないと彼を軽蔑し、母親は兄ばかり虫眞にする。兄とよく喧嘩し、兄を怪我させてあやうく父親に勘当されてしまうところだった。また、「町内では乱暴者の悪太郎と爪弾きをする」故に「他人から木の端の様に取り扱はれる」。下女の清は坊っちゃんを可愛がっているが、肉親ではない。ウイルトシヤが国を離れてヨーロッパ社会の「脱落者」であったのに対して、坊っちゃんは家族の絆の「脱落者」である。「ファレサアの浜」での西洋（文明世界・中心）から非西洋（未開の地・周縁）へ越境する図式は、『坊っちゃん』においては国内での移動となり、東京（都会）から「四国辺」（地方）へとスコープが縮小される。

しかし、「脱落者」でありながらも、一人とも「中心」への回帰という願望を持っている。先述したように、ウイルトシヤは、英国に帰って居酒屋を始めたいと言い、坊っちゃんは、「どうしても早く東京へ帰って清と一所になるに限る」と言う。しかし、結局のところ、ウイルトシヤはケイスを殺し、悪に勝った「英雄」となり、「中心」へ帰らないままファレサアに残る。他方、坊っちゃんは赤シャツらに復讐したが、結局「坊っちゃん」論で定説化されてきたように、善玉がその地から追い出され、「敗北」した「英雄」のように「不浄な地」を離れるしかない。

また、このような「脱落者」が、一人の女性に支えられていることも看過できない。ウマと清は、ウイルトシヤと坊っちゃんにとつて大切な存在である。若いウマと老婆の清は、越境する二人の男性の「脱落者」と同じように、そもそも物語の舞台あるいは異境（ファレサア、「四国辺のある中学校」）に属しない人物である。ウマは「土民」だが、ほかの未開の島からファレサアに来ており、厳密に言うると、彼女もウイルトシヤのように、ファレサアにおいて「異人」のような存在である。それに対して、清はいうまでもなく、「四国辺」の者ではない。二人の相違点をあげれば、年齢がたいそう離れているほか、それぞれの存在が物語にもたらす効果は異なっている。換言すれば、『ファレサアの浜』では、ウイルトシヤとウマとの異性愛が描かれているのに対して、『坊っちゃん』ではうらなり、赤シャツとマドンナをめぐる事件があるが、主人公である坊っちゃんと恋愛関係を持つ女性登場人物がいない。そのため男性的な物語である『坊っちゃん』は「同性愛小説^手」とも見なされているのである。ウイルトシヤの「異郷に唯一の味方」であるウマは、彼に「貴君良い人なんだわ」と言い、一方清は坊っちゃんを「真つ直でよいご気性だ」と褒める。ウマは、「あたし、貴君の御嫁様」、「あたし貴君のものよ、豚みたいなものよ」とウイルトシヤに従属することを宣言し、支配者である「白人に非常な尊敬心を抱」き、主従関係を重んじるのである。清も「昔風の女」のようで、坊っちゃん

との關係を封建時代の主従のように考えていた。つまり、二人の女性は、自分が主人公を支える従属的立場であると認識している。

自分の愛する男への献身や自己犠牲性は、二人の女性に共通して見受けられる。交際禁止を食っているウマとの結婚は、ウィルトシヤの商売に影響を及ぼす。真相を知ったウィルトシヤに、ウマは「私、お別れしますわ。そうすれば交際禁止もなくなりますもの。そうして貴君、沢山コブラが御手に入りますわ」と彼のために別れを言い出す。また、藪で仕掛けを破壊しようとするウィルトシヤの行動がケイスに発覚したことを知らせるために、ウマは直ぐ家を飛び出して自分の怖がっている叢林に入った。他方、清も色々坊っちゃんに尽くしている。小遣いで「金鏢」「紅梅焼」「鍋焼饅頭」「靴足袋」「鉛筆」「帳面」を買ってやり、寒い夜に寝ている枕元まで蕎麦湯を持ってきて、「三円」も貸す。兄を怪我させた坊っちゃんを勘当すると言いつ出した父親に、清が泣きながら謝ったおかげでようやく父親の怒りが解けた。さらに、赤シャツが坊っちゃんの単純さを笑うのに対して、坊っちゃんのおき理解者として、「清はこんな時に決して笑った事はない。大に感心して聞いたもんだ」と言っているように、坊っちゃんに尽くしている。ウマはウィルトシヤが叢林へ入って行く事に反対し、彼が行けばもう帰って来られないと心配しているのに対して、清は「坊っちゃん竹を割った様な気性だが、只肝癪が強過ぎてそれが心配になる」と言い、彼女たちは支えている

男を心配している。

両作において、自分を支えてくれる女性に対する二人の男の見方も似通っている。ウィルトシヤは、ウマが賤しい「土民」でなく、「英国の故郷の娘であったかのような気持にすっかりなってしまう」、ウマが本当に、優れた声楽家の歌を聞きに音楽会へ行くために盛装した伯爵夫人であって、自分のような賤しい貿易商人には勿体ないような気持「持」を持っていて、坊っちゃんも同じように、「清は敏苦茶だらけの婆さんだが、どんな所へ連れて出たつて恥づかしい心持はしない」、「教育もない身分もない婆さんだが、人間としては頗る尊とい」という。二人の男にとつては、自分を支えてくれる「土民」のウマや無教育の清は、彼女たち自身の短所を無視することができぬくらい、立派で重要な存在なのである。小谷野敦氏は、坊っちゃんが孤高な英雄ではないと次のように指摘している。

ひとりの女の無条件の支持がなければ英雄が英雄たりえない、
(中略) 清という女中を守護神として持つことよつて坊っちゃん
は「ただ一人立つ」孤高の英雄とは言えなくなつてくる。
(注)

二人は英雄でありながらも完璧な英雄でなく、負の面や欠陥を持つ不完全なヒーローに過ぎないのだ。要するに、ウィルトシヤも坊っちゃんも、物語の男性主人公というヒーロー、あるいは英雄とい

うヒーロー、いずれの面でも不完全に終わってしまったのである。また、「孤高」な英雄ではないかもしれないが、悪玉を懲らしめる「英雄」であるウイルトシャも坊っちゃんも、「ひとりの女の無条件の支持」を得た「英雄」であるのは事実である。

二、人種差別主義・植民地主義的な構造

善玉と悪玉との敵対物語の形式をとる「ファレサアの浜」に含まれている植民地主義というテーマに、よく文明批判をし、常に世界の動きに敏感である漱石は気づいたのだろうか。漱石が「する／＼と書て了つた」と語ったように一気呵成に書き上げて『ホトトギス』で人気を博した『坊っちゃん』に比べると、「ファレサアの浜」は掲載されるまで様々な問題に直面していた。バリー・メニコフ氏は、「ファレサアの浜」が掲載されるまで、内容をめぐって編集者による様々な改変が行われたことについて綿密な分析をし、「句読点が系統的に改変、単語が訂正され、ねじられ、削除される。段落が歪曲され、簡略化される」と述べている。^(注9)要するに、これらの改変は、「南海」のエキゾチックな姿を読者に呈する一方、「南海に住む貿易商の物語」に含まれるテーマ、つまり貿易商ニケイス(ウイルトシャを含める)ニ白人ニ文明の弊害・醜悪さを露呈することを和らげる試みなのであった。^(注10)

同じく英国人作家であり、『ジャングル・ブック』を書いたジョ

セフ・ラドヤード・キップリング (Joseph Rudyard Kipling, 1865-1936) が一八九九年に発表した「白人の重荷」という詩はよく知られている。^(注11)第一連の「動揺した野蛮な民の世話をやくためだ」、「無愛想ななかば悪魔で／なかば子供のような連中だ」という表現は、当時の南海の支配者白人の被支配者への視線を表している。自分白人なので原住民より優位に立ち、文明国の出身で未開の島に文明をもたらすような見方を、ステイブンソンはその詩が掲載される七年も前に主人公ウイルトシャの口を借りて次のように述べさせている。

「自分は白人で、本国では非常に地位が高く、この島へ来たのは利益を与えたい、文明を齎らしたいと思つて来たのである
(後略)」
(四〇頁)

島の者の心理は容易にわかる。十歳か十五歳位の少年の気持、それが普通の島の者の気持である。
(八六頁)

未開の世界へ文明をもたらす義務を背負い、その「重荷」を感じながら植民地を作るといふのはまさに当時の白人の有色人種に対する人種差別主義、植民地主義を正当化する口実である。前掲のバリー・メニコフ氏は、次の見方を持っている。

非白人文化の崩壊が白人の文明の責任に帰し、また人種と文化の優越性を鼓吹することがヨーロッパ人の拡張政策・主義の口実に過ぎないとステイブンソンは分かっている。彼はこのようなことを「ファレサアの浜」において示唆している。彼は、この物語を明示的に表現できないのを知っており、テーマを隠すようにほかの手段をとらねばならない。(原書註12)

また、同氏は、「人種差別主義、植民地主義、性差別主義、文化の崩壊は「ファレサアの浜」のテーマである」と指摘している。(註13) 白人の侵入によって、植民地・従属国においては、いわゆる文明化されることで自らの固有の文化が余儀なく漸次変形、崩壊し、西洋化されてゆく。キャサリン・ラインハン氏も、人種差別主義のほかに、フェミニズムの視座で論じている。(註14) 一体、「ファレサアの浜」を書き上げた作者の意図はどうだったのか。ステイブンソンが一八九一年九月二八日に親友のシドニー・コルヴィンに宛てた書簡では、「ファレサアの浜」について次のように述べている。

この物語には、沢山の事実や幾つかの喜劇が入っている。これは初めてのリアリスティックな南海の物語だ。つまり、本物の南海の特性と生活が詳しく描かれているのだ。私が見た限りでは、いままで試みた人は、みんなロマンスに夢中になり、結局

氷砂糖のような偽物の叙事詩に終わってしまい、すべての趣旨が失われていたのだ。(原書註15)

さらに、一八九二年五月十七日、同氏宛の書簡では、ステイブンソンはこのように述べている。

これは一つのリアリズムだ(中略)ほとんど全ての醜悪が白人の中にあることが分かるだろう。(原書註16)

「ほとんど全ての醜悪が白人の中にある」と言っているステイブンソンは、決して白人の味方ではない。弾劾する観点を持ちながら、南海にいる貿易商の真の姿を描いている。「ファレサアの浜」は、ヨーロッパの植民地主義観点、あるいは「白人の重荷」のように、原始的、野蛮な民族に文明をもたらす思想を正当化し、代弁しようとした作品ではない。「ファレサアの浜」では、「中心」から来た白人たちは、商売・権力闘争でファレサアにて互いに敵対する。英語も土語もうまく操るケイスは、ファレサアで非常に影響力のある人物である。迷信深い「土民」は彼が「魔王」の息子だと信じ込んでいる。ケイスは商売のライバルであるウィルトトシャにタブーにされたウマとの結婚を勧め、彼を商売ができなくなる窮地に陥らせる。他方、坊っちゃんの最も大きな敵手である、悪玉の赤シャツも

出身地不明である点で、「国籍不明」のケイスと同様である。特に、「文学士」であり、「大学の卒業生だからえらい」赤シャツは、「立派な教育がある」ケイスに近似する。なぜステイブンソンも漱石も悪玉が出身地不明のような設定をしたのかについてはのちに考察するが、まずケイスがウィルトシャと同様に二面性を持つ人物である点に注目しておこう。

気が向けば応接間で喋らせても恥ずかしくないような口もきいたが、そうかと思うと米国の水夫長も顔負けする程ひどい言葉も吐くし、また土民が気持が悪くなる位烈しい物言いもするのだった。

(九頁)

ステイブンソンのこのような設定は、おそらく二重の意味を示唆している。「ケイス⇨悪玉⇨白人」という図式は、最も直接にステイブンソンの「ほとんど全ての醜悪が白人の中にあることが分かるだろう」という気持ちを表す。即ち「白人⇨文明国から来た人⇨支配者⇨悪玉」であり、もちろん「白人の中に」ウィルトシャも含まれ、ステイブンソンの白人に対する批判が示されている。他方、悪人ケイスを誅するウィルトシャは、単純に「善玉」だけで片付けられない存在である。「非合法」な結婚で現地の女性を欺瞞し、「土民」を蔑視するという矛盾が見受けられたからである。

ステイブンソンが悪玉のケイスを出身不明の設定にしたのは、おそらく悪玉がファレシアにいる白人だけでなく、英国か米国かという特定の国の人間を指すのでもなく、ヨーロッパに在る植民地主義を抱える文明国全般の白人を指そうとしたからではないかと論者は思う。では、なぜ漱石も坊っちゃんが一番の敵手赤シャツの出身について言及していないのだろうか。前掲の大谷鏡石宛書簡に「山嵐の如きは中学のみならず高等学校にも大学にも居らぬ事と存候然しノダの如きは累々然としてコロがり居候」と述べ、また、前掲の「文学談」でさらにこのように述べている。

然し人が利口になりたがつて、複雑な方ばかりをよい人と考へる今日に、普通の人のよいと思ふ人物と正反対の人を写して、
(中略) 現今普通人の有してゐる人生観を少しでも影響し得た
ものである。(注17)

ステイブンソンが、善玉ウィルトシャを自分の出身と同じように「英国民」と設定し、悪玉ケイスの背景を不明だとしたのと同様に、漱石も善玉坊っちゃんを江戸っ子だと設定し、悪玉の出身にあまり触れていない。漱石が洩らしている以上のような感慨を考慮すれば、おそらく「悪党」は都会か地方かの出身に限らず、「複雑な方ばかりをよいと考へる」「現今」の「普通人」を指すものであつ

たのではないだろうか。悪党は、赤シャツのように「利口」、「複雑」であり、坊っちゃんのような「単純」さを失っている人々のことである。

両作では、「中心」の人々が、「周縁」へ行き、そこで悪玉と敵対するという「調子」は一致している。また、文明国から来た白人が支配者として未開地に行き、被支配者である未開人を教育したい、文明化したいということと、支配者・被支配者という存在は、「坊っちゃん」の学校・教師・生徒、あるいは教育者・被教育者のような構図と同様ではないか。換言すれば、学校制度を骨子とする『坊っちゃん』は、南洋物語「ファレサアの浜」と同様に、人間を啓蒙する舞台において展開された物語である。『坊っちゃん』の構想は漱石自らの教職経験に基づくかもしれないが、漱石は、「ファレサアの浜」から「調子を学ん」で『坊っちゃん』の舞台を、「ファレサアの浜」のように「教育」に関わる学校と設定したのである。また、悪玉の出身地を特定していない漱石も、ステイブンソンのように、批判の対象を「現今普通人」（＝一般的な考えをする人、あるいは当時植民地主義・人種差別主義を当たり前のように考える白人）としたのであろう。つまり、二人の作者は、出身不明の悪玉を懲らしめることによって、重層的な意味を示唆している。権力を握る人を批判しながら、漱石は、「普通の人のよいと思ふ人物と正反対の人を写して、（中略）現今普通人の有してゐる人生観を少し

でも影響し得」ようという意図を示しているのである。

支配者側のウイルトシャが被支配者の「土民」を軽蔑するように、坊っちゃん（教師・支配者）は生徒（被教育者・被支配者）を蔑視する。また、「ファレサアの浜」では、被支配者側の「土民」は支配者への抵抗がなく、現地の女性も白人と結婚することを慣例だと見なし、結婚証書を大切に行っている。ウイルトシャは絶対的な支配者側に立っているのに対して、坊っちゃんは、生徒にとって支配者であるかもしれないが、校長・教頭の地位と比べれば被支配者側にも属している。漱石は、坊っちゃんを被支配者側（特に弱い立場に立っているうらなり）の味方とし、学校で権力を握っている支配者である校長の狸や教頭の赤シャツという権威への拮抗を以て、被支配者から支配者への挑戦を示唆している。「ファレサアの浜」に見られない支配者への挑戦と、ウイルトシャが鳥に残り、坊っちゃんが鳥を離れるという結末の部分は、漱石の言っている「けれども之から脱化した」ことにあたる。「南海に住む貿易商の物語」である「ファレサアの浜」と「学校物語」である『坊っちゃん』との近似性には、漱石の言っている通り、「誰も気づくまい」。

おわりに

ステイブンソンは、ヨーロッパ人の憧れているエキゾチックな南海楽園のイメージをひっくり返し、真実を曝す「ファレサアの

「浜」を書き上げた。作品が掲載されるまで様々な変更がなされており、読者の目の前に提示される南海の姿と当地の真の情況や、作中の種々の面白い要素は、ステイーブソンを愛読する漱石に刺激を与えたのだろう。「ファレサアの浜」と『坊っちゃん』の両作は一見したところ方向性がまったく異なっているが、「調子を学んだ」と言う漱石の言葉は、両作の影響関係について非常に重要なものであり、「文明」の地出身である両作の主人公が「周縁」へ行き、当地で様々な出来事が起こり、善玉が悪玉と対峙して復讐を遂げるなどという物語の表面的な図式から、物語に見える人種差別主義・植民地主義、支配者・被支配者（教育者・被教育者）という構造や舞台の設定と、二面性を持つ主人公という人物造型の細部まで、両作は非常に近似している。漱石は、ウィルトシヤに見える矛盾した二面性、あるいはその不完全なヒーローの資質を坊っちゃんに書き換えをし、不完全なヒーロー坊っちゃんを形作ったのだ。また、このような不完全なヒーローを支えている女性ウマと清も、共通点と相違点を持っている。さらに、「ファレサアの浜」の人種差別主義・植民地主義に対しての批判が『坊っちゃん』にも見受けられる。

『坊っちゃん』の構想は、漱石の教職経験から取材したといわれる一方、「ファレサアの浜」から様々な素材を摂取したことも明らかにあっただろう。漱石は「調子を学んだ」と言っているが、本人の明言がない限り、その「調子」が内包する曖昧さについては謎の

ままである。しかし、作品の全体像からいうと、両作の共通項、つまり漱石の言及している第一人称の語り手の設定、言葉、色々な悪行をする悪党の設定というような「調子」を学んだだけでなく、人物の造型上において、善と悪（人種差別主義）の二面性を持つ男性主人公とその不完全な英雄像、女性登場人物の献身、従属的立場と男性主人公の彼女たちへの尊敬、悪役の出身不明の設定という人物造型、植民地主義のような支配・被支配の物語構造や、「普通の人のよいと思ふ人物と正反対の人を写して、（中略）現今普通人の有してゐる人生観を少しでも影響し得たものである」というアイロニーを設けることも、決して偶然といえないほど「ファレサアの浜」と同様な「調子」を持っているのである。

注

(1) 「坊っちゃん」とステイーブソン「ファレサアの浜」——「調子を学んだ」ことをめぐって——『近代文学試論』第四十四号、二〇〇六年十一月、広島大学近代文学研究会

(2) 「ファレサアの浜」の原文に使われている、現地の住民を称する「native」という言葉は、「旧式の、侮辱的なヨーロッパ人の植民地開拓者・観光客から見える国の非白人の原住民」(The Concise Oxford Dictionary, 10th Edition, Oxford University Press, 1999) という軽蔑的な意味が含まれている。「土民」の語は現在では穏当でないと言者は承知しているが、ステイーブソンの描こうとする、作中の当時の白人貿易商が原住民を蔑視するニュアンスを保持するために、本稿では、訳本の「土民」をその

まま引用している。

- (3) 『漱石全集』第二十二巻、一九九六年三月、岩波書店
- (4) 夏目漱石「文学談」、初出『文芸界』五巻九号、一九〇六年九月一日
〔漱石全集〕第二十五巻、一九九六年五月、岩波書店
- (5) 川嶋至「学校小説としての『坊っちゃん』」『講座夏目漱石』第二巻、一九八一年八月、有斐閣
- (6) 大谷裕文「旅とユートピア——楽園幻想とポリネシア旅行」『異世界・ユートピア・物語』井口正俊・岩尾龍太郎編、二〇〇一年四月、九州大学出版会
- (7) 石原豪人「謎なき・坊っちゃん——夏目漱石が本心に伝えたかったこと」
二〇〇四年八月、飛鳥新社
- (8) 小谷野敦『夏目漱石を江戸から読む 新しい女と古い男』一九九五年三月、中央公論社
- (9) Barry Menikoff, *Robert Louis Stevenson and "The Beach of Falesa", A Study in Victorian Publishing*, Stanford University Press, 1984. (「ロビン・ルイス・ステューブンスン」『フォーマラの浜』——サイタトリマ朝出版会) 朝出版会) 朝出版会)
- (10) 例えば、ウィルトシヤは自分の家を聞かずに見ゆる「土民」を見て、ウマに「この鳥の者みたいな馬鹿な者を見た事がなら」と言っている。ステューブンスンの原稿では、*"I never saw such damnfool kanakas as your people here,"* *ひまが*、*"I never saw such fools of Kanakas as your people here,"* *へ*」箇所が改変されていた。*"damnfool"* (途方もなく愚かな) という強い表現を「fools」(愚かな、馬鹿けた) *へ*と和らげさせた。また、ウィルトシヤが「土民」に対しての優越性を強調するために使われている文字の *"kanakas"* が、ある国の国民を尊重するために付与される大文字の *"Kanakas"* に変更されてしまったのである。

(11) 「白人の重荷」全七連の第一連は次のようである。(平川祐弘訳『和魂洋才の系譜』一九八七年三月、河出書房新社)

白人の荷を背負え/君たちが育てた最良の息子を連れ/君たちの捕虜の需めに応ずるために/君たちの息子に義務を課し流浪の地へやるのだ/重い武装をつけたまま/動揺した野蛮な民の世話をやくためだ/君たちが新たに捕まえた、無愛想な/なかば悪魔で、なかば子供のような連中だ

- (12) 注(9)に同じ
 - (13) 注(9)に同じ
 - (14) Katherine Bailey Lincham, "Taking Up with Kanakas: Stevenson's Complex Social Criticism in 'The Beach of Falesa'", *English Literature in Transition: 1880-1920*, Vol. 33, No. 4, 1990. (「カナカに熱中する——『フォーマラの浜』におけるステューブンスンの複雑な社会批判」)
 - (15) Robert Louis Stevenson, *The Works of Robert Louis Stevenson*, Valima Edition, Vol. XXII (Letters III, 1887-1891), Sidney Colvin, ed., AMS Press, 1974.
 - (16) Robert Louis Stevenson, *The Works of Robert Louis Stevenson*, Valima Edition, Vol. XXIII (Letters IV, 1891-1894), Sidney Colvin, ed., AMS Press, 1974.
 - (17) 注(4)に同じ。
- 【付記】
- ※ 『坊っちゃん』のテキストは『漱石全集』第二巻(一九九四年一月、岩波書店)を使用した。
- ※ 『フォーマラの浜』の英語テキストは『The Beach of Falesa』(Robert Louis Stevenson, Melville House Publishing, 2005)を使用した(初出: *Illustrated London News*, 一八九二年七月九日~八月六日)。

※「ファレサアの浜」の日本語訳は『南海千一夜物語』（中村徳三郎訳、一九五〇年二月、岩波書店）を使用した。

※傍線は私に付した。

—レオン・ユット・モイ、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学—